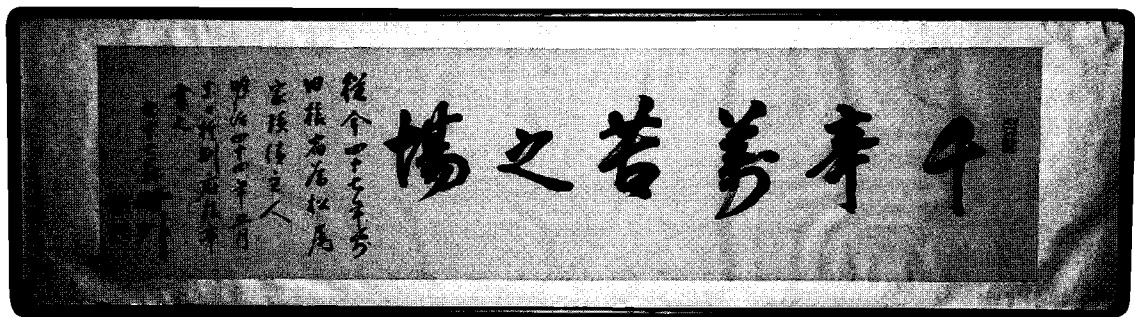


べっふの文化財

No.32

平成13年3月

— 歴史記念物 —



井上馨 扁額

別府市教育委員会

未指定であるが指定に準じる価値の高い文化財は、地域の人々に篤く庇護されているものもあるが、いつのまにか移転され、あるいは埋没・崩壊して喪失の寸前にあるものも少なくない。先年度の「べっぶの文化財」第31号には指定はなくとも郷土の歴史の証となる文化財を数点まとめ発行した。

今年度の「べっぶの文化財」第32号は、市井の片隅に残されている、郷土の歴史に関わりが深い記念物となるものを選んで掲載することにした。

郷土の歴史や文化財に対して、多くの人々の関心を惹起することが出来れば、大いに意義があるものと考えられる。

表紙写真説明 扁額「千辛万苦之場」

慶応元年別府村若松屋に潜伏して再起を期した、井上馨（聞多）は、功成って明治四十四年再び若松屋を訪れた。公は若松屋離れ座敷に、当時を知る人を集めて談笑し、四十七年前の苦難の日を回顧した。扁額「千辛万苦之場」は、この時公が揮毫したものである。



井上 馨 集合写真

絵画と彫刻

肖像画は杵築藩士十市石谷。賛は帆足万里である。
と いちせきこく

友梅禅師肖像（松音禅寺の開山）

濱脇赤松の松音寺は、臨済宗妙心寺派の禅寺で、府内萬寿寺の末寺であった。本尊の十一面観音は建久七丙辰年（1196）に宇野新藤五郎（尉）が播磨国から背負って赤松に勧請し小庵を建てた。その後庵は天正十四年（1586）島津軍の侵攻による兵火にあい灰燼にきしたといわれる。



松音寺友梅禅師（赤松公民館）

松音寺の開山は「勅諭寶覚真空雪村友梅禅師大和尚」で、貞和二年（1346）十二月二日と刻した開山塔（別府市指定文化財）がある。精密画の手法で描かれた友梅禅師の肖像画は、十一面観音とともに旧松音寺（赤松地区の公民館）に保存されている。

後藤柏園（薰平）肖像（野田村の碩学）



後藤柏園肖像（野田 後藤家）

後藤柏園は、萬里門下十傑の一人にあげられ、勝田季鳳の漢詩と、薰平の文章は双璧と称されていた俊才であった。屋敷内の柏樹に因んで柏園と号した。

寛政十一年（1800）野田村庄屋後藤八左衛門の嫡子いそしに生まれ、名は恭・字は士敬といった。父は薰平の学才を惜しみ、姉に養子を迎えて庄屋職を継がせ、学門の道に勤ませた。

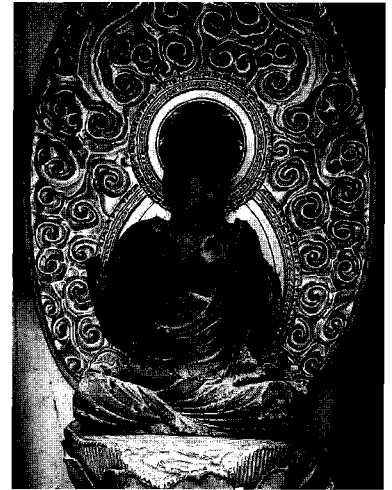
蔵書数千巻、和漢籍に精通していたといわれる。天保年間、預所大名の嶋原藩主の登用を固辞し、野田村に私塾を開いて近郷の子弟の教育に当たった。

濱脇 湯薬師如来坐像（平安時代仏像）

濱脇温泉薬師堂の本尊である。

破損が著しいが、小像のわりに力強い肉付きや鋭い衣紋の彫口を示し、平安前期彫刻の名残が見られる。

濱脇温泉は別府八湯の中では最も起源が古いとされている。聖徳太子の父君、用明天皇が病氣平癒のためにこの地に行幸し、入浴したという。この薬師佛は豊國法師の作と伝え、同温泉の守護佛として祀られてきたものである。



湯薬師坐像（濱脇薬師堂）

野田 長泉寺薬師如来佛坐像（平安時代仏像）

浄土宗朱湯山長泉寺の本尊である。

朱湯山の山号は豊後風土記の「赤湯」に因んだものであろう。略縁起によれば後朱雀天皇の寛徳元年（1044）重病であった親仁親王（後の後冷泉天皇）の夢に薬師如来が現れて「我は竈門荘の薬師佛であるこの霊泉に入りて我に祈れば、たちどころに癒ゆる」とお告げがあったので、下向して入湯すると直ちに全快した。

その佛恩に報

いるため、同荘の柴石に一字を建立して、湯薬師を安置し、寛徳院朱湯山長泉寺と名付けた。

この本尊は、乳のでない婦人が祈願すると、験があったといわれ、「野田の乳薬師」とあがめられている。



薬師坐像（長泉寺）

西念寺 阿弥陀如来坐像（神仏分離）



阿弥陀如来坐像（西念寺）

八幡竈門神社は神亀四年(727)に仲哀・応神天皇、天長三年(826)に神功皇后の神霊を勧請した八幡神社である。竈門荘は天平勝宝元年(749)宇佐神宮神宮寺の弥勒寺の荘園なり、竈門宮にも神宮寺・長福寺など七か寺の神宮寺ができ宇佐宮と同じく典型的な神仏混淆の八幡宮として

明治維新を迎えた。

明治元年、政府は尊皇思想のもとに神仏分離政策を行ない、往古より竈門宮境内に安置されていた阿弥陀佛が西念寺に移されたという。別府市で神仏分離の歴史を伝える唯一の仏像である。

宝寿庵 阿弥陀如像（渡辺五郎右衛門念持佛）

寛文六年(1666)鶴見村の渡辺五郎右衛門は中国人に教わって鶴見村や野田村で明髻の製造に成功した。その後、度重なる災害や清国から輸入される安い唐明髻のために経営がうまく



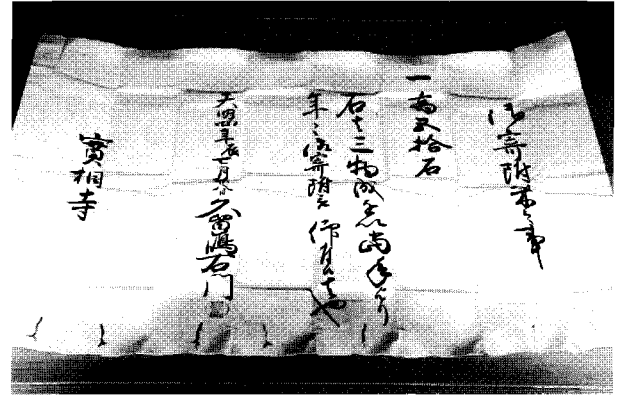
宝寿庵 阿弥陀如来坐像（渡辺家）

いかず、剃髪して西岸と号し鶴見村原に草庵を結び、阿弥陀如来坐像を安置して宝寿庵と称した。「日本に和明髻取り立て始め候大切の者也」といわれた五郎右衛門は享保五年(1720)十二月逝去した。

宝寿庵の近くに、西岸の墓石(市指定文化財)がある。

書物

三物成免除の墨付（森藩保護寺）



寄附状（実相寺）

慶長六年(1601)速見郡の鶴見村と辻間・頭成は森藩久留島氏の領国となった。実相寺はもと実相寺山の東麓にあったが石垣原の戦いで焼失した。鶴見村が久留島領になって天和二年(1682)即現禅師が現在地に再興した。領主久留島氏は実相寺に「角切縮三字」の家紋の使用をゆるし、年々五十石の賄料を寄進した。

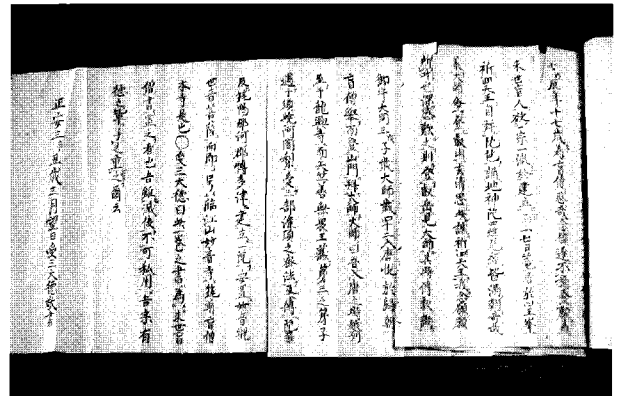
「御寄付米之事
一高五十石

右者三物成を以当年ヨリ
年々御寄付被仰付候者也

天明四年辰七月廿八日 久留島右衛門印
実相寺

なお、火男火売神社も久留島氏の家紋の使用を許されていた。

石垣護生院文書（地神盲僧琵琶）



護生院文書（石垣東）

護生院は成就院玄清法流の伝統を受け継ぎ、盲僧琵琶を伝えてきた。地神盲僧は土用の丑の日に檀家

墳 墓

を訪れて亀茲琵琶^{くじ}を弾きながら土用経・地神陀羅尼経を説誦^{とくしよつ}して、竈荒神のお祀りや荒神祓・地神祓いなどをしてきた。地神盲僧は古くは比叡山正覚院、近世では粟田口青蓮院の保護のもとに地神盲僧琵琶の法灯を護ってきた。

現在、護生院には「仏説地神陀羅尼経奉誦盲僧为天台宗因縁」正安三辛丑歳（1303）三月の文書を始め、六通の古文書と弘化四年（1843）の鑑札が残されている。

神宮寺大般若波羅密多經（地頭竈門氏納経）

般若波羅密多經は、天変地異・疫病退散・武運長久・国家安穩・五穀豊穰の祈願のために納経・転読されたものである。

竈門の庄の地頭職は弘安六年（1283）の豊後凶田帳に、「竈門庄八拾町 弥勒寺領 地頭 本庄五三町 御家人竈門又太郎貞継道善」とあり、竈門氏祈願のための納経で神宮寺の僧侶によって写経・納経・転読したものである。

左の教典は宝治二年（1248）に神宮寺の僧侶観知が写経したもので、県下で最古。右の写経は永禄二年（1559）未巳正月吉日、市河氏貞女が竈門新左衛門尉鑑述の為に発願し、老母が神宮寺に納めたものであるとされる。竈門宮に納経された般若波羅密多經は七通残っている。



竈門氏般若波羅密多經（土屋家）

矢田希一（梅洞）（梅洞對岳樓塾主）

矢田梅洞は文政十六年（1828）、石垣の医師矢田連の三男に生まれた。幼名は棟吾といい元服して希一、梅洞、竹雨と名乗った。天保十九年四月、十九歳の時、父や次兄のすすめで、広瀬淡窓の門下で学んだ。学業



矢田希一（梅洞）（墓碑）

を終えて帰郷した希一は文久二年、中石垣村で梅洞塾對岳樓を開き、咸宜園にならって近隣の子弟を教育した。郷土の先人の多くは對岳樓の卒業生である。

明治十年、西南戦争の時塾を閉鎖して、第二大区十四小区石垣村民会代議人となり、後副議長・議長や大区議員になって地方政治に貢献した。希一は勤王の心が厚く長三州と親交があり、烈士矢田宏は甥にあたる。明治二十六年六十六歳で逝去した。

荒金儀八郎（呉石）（俳人）



荒金呉石の墓碑（野口墓地）

大分郡乙津村の生まれ。二十余歳で別府荒金家に迎えられて、中町の荒金家を継いだ。長男の市郎兵衛に豪商^{たほこ}狭屋の家督を譲り自ら後見となった。府内藩大給^{ちかよし}閑山公近訓に目を掛けられ、府内藩を始め白柞藩などに財政援助をおこなった。また、呉石の俳号をもつ俳人でもあり、風

流の道にいそしみ、田能村竹田・毛利空桑・帆足杏雨・津田秋臯・後藤碩田などと親交があった。

明治二年八十五歳で他界した。墓碑銘には毛利空桑の書になる「旅人をうらやむ日なり春の風」の辞世の句がある。

永井亀吉（灘亀）（井上馨庇護者）



灘亀の墓碑（市営芝尾墓地）

元治元年（1864）、明治の元勳井上馨がまだ聞多といていた頃、山口城下で俗論党の刺客に襲われた。

慶応元年、聞多は春山花助と変名して別府の若松屋に潜伏した。この時、土地の侠客灘亀は若松屋の主人に

依頼されて、聞多を子分に仕立てて身边を擁護した。灘亀は晩年生活苦から目を患い、明治三十五年浜脇で行倒れて変死を遂げた。

同四十四年、来別した井上馨は灘亀の死を悼み墓石を建てて旧恩に報いたという。

「法名釈退来 俗名永井亀吉 明治三十五年旧暦八月三日死 行年六十七才」側面の「懐旧井上馨建之」は井上馨が揮毫したものである。

巨 石

姫山のメンヒル（民俗記念物）

「…周囲は神々しいまでに原始林に巡らされ、一度この霊地に入り先住民族の信仰の対象物を見ると、直ちに襟を正さしめ、原始的神秘の感に打たれることを禁じ難いものがある。高さ二五尺、周り五十尺の自然の巨岩…」と『大別府史跡名勝（昭和十年）』にある。最近では開けて巨石まで道が通ったが、神秘的な荘厳さは備わっている。

「メンヒルとは巨石記念物でほとんど加工を加えず単独で地上に立てられたもので、先史時代の信仰記念物と考えられる立石である。」の点でメンヒル

としては疑問視され、考古学的な資料として扱われていない。

この巨石の付近一帯は、縄文・弥生の周知遺跡で



姫山のメンヒル（野田）

すでに遺構が発掘され、遺物が採集されている。このような環境において、原始信仰が起こったことは否めない。別府市にとって数少ない民俗資料として貴重なものと思われる。

大石の大石（道標記念物）

桜ヶ丘大石は、古代から目印にされたもので西海道（小倉街道）はこの石の側から春木川（御門川）を渡渉して対岸の石垣地区へと続いていたそうである。江戸時代には南鉄輪・平田・北石垣村の分岐点で、この巨石が動かぬ境界の起点となっていた。一面の草原にひときわ目立つ道標の役割を果たしてきた、別府市街地内で最も大きな自然石である。

大石のもとに、維新後南鉄輪村の保長で、後に一四区の戸長（村長）になった加藤新平が、交通の不便であった大石付近に、私費を投じて道路工事をおこなった顕彰碑がある。むかしこの大石の天辺に「大將軍」の石殿があったといわれるが今はない。



大石の大石（桜ヶ丘）

【参考文献】

大分県立歴史博物館『湯浴み～湯の歴史と文化～』1999
別府市『別府市誌』1985

執筆者

入江 秀 利

土屋 公 照

べっぶの文化財 No.32

発 行 平成13年3月31日
別府市教育委員会社会教育課

編 集 別府市文化財調査員
別府市教育委員会文化・スポーツ振興課

印 刷 別府印刷株式会社